

主論文の要約

論文題目

The dynamics of culture and moral judgments

(文化と道德判断の力動的関係)

所 属

名古屋大学大学院環境学研究科

氏 名

MATSUO, Akiko (松尾 朗子)

論文内容の要約

道德判断とは、ある行動が正しいまたは間違っていると判断のことである。道德判断に関しては長らく発達心理学の分野で研究されており、Kohlberg (1981) の道德性発達理論は道德研究に大きな影響を与えた。この理論は、理性的な能力が道德性の発達と関わっており、人間には道德性が発達していく決まった段階があると主張している。さらに、この理論は、正義や個人の権利といった概念だけに注目し、道德性の発達は個人や文化の違いを越えて普遍的な段階であることを前提とする。しかし近年では、社会心理学などの分野で、道德判断の基礎をなす心理的過程について研究が行なわれ始めている。例えば、「親を口汚く罵る」という道德違反状況を観察し、その根拠を考える時、ある人々は「誹謗中傷で相手を傷つけているから悪い」という理由付けをするかもしれないが、またある人々は「親という目上の存在を敬っていないから悪い」という理由付けをするかもしれない。このような違いは、一定方向に向かって成熟していくという道德性の発達の度合いでは説明しがたい。そこで、社会心理学の分野においては、集団による道德判断の質的違いの解明や、社会行動における道德判断の吟味が盛んに行われている。Kohlberg の道德一元論に対して、多くの社会心理学者たち(例えば Bloom, Gilligan, Miller など)は、道德判断の基準が並列して複数存在するという道德多元論を唱えている。文化人類学的アプローチを試みた Shweder et al. (1997) によると、道德性には自律の倫理(危害や公平)、共同体の倫理(義務や集団)、神性の倫理(純粹さや高潔さ)の3つの観点が存在し、自分が所属する文化が持つ性質に見合った観点を重要視しながら生活しているという(Big Three 理論)。これら3つの観点に関する議論は、文化によって異なる道德判断を説明しうる。なぜなら、人間は道德判断の根拠について理論的定義から学ぶわけではなく、経験的に、同一文化の他の成員たちがどのような場面でどの

ように判断するのかを頼りに理解するからである。

本論文の第1章では、道德多元論に関連する道德研究の現状を概観し、文化という概念と機能について論じた。さらに、比較文化的な道德判断の研究に関して議論し、3つの問題点を指摘した。1つ目は、人間と環境の相互作用を考慮に入れていないことである。道德判断の背後にある心理的過程に文化差が影響するとの知見は蓄積されつつあるが、道德判断状況に対する個々の人間の反応のみに焦点を当てる従来の研究手法では、その背後にあるとされる文化の影響が、真に人々の道德判断に影響しているかは明らかにできない。すなわち、環境に対する人々の影響だけではなく、ある環境に住む人々によって育まれる善悪とは何かに関する集団的共有信念の影響を考慮に入れなくてはならない。なぜなら、そのような共有信念は、個人において内面化され、個人間で共有され、集団内で蓄積され、それが個々人に影響するという循環的機能、つまり相互作用を果たしているからである。2つ目は、道德判断の伝達と共有についての知見が乏しいことである。道德判断には個人の生き方の基礎となるという機能だけでなく、その判断基準を他の集団成員と共有することで文化自体の維持に影響するという社会的機能がある。自文化にとって重要な道德基盤を理解したり、自分自身の道德性を周りに表明したり、道德違反を行なった集団成員を罰したりするために、道德判断は社会的に伝達され共有される。しかし、道德判断が同一文化内でどの程度共有されているかに関しては、明らかにされていない。3つ目の問題点は、実験刺激内容の偏りである。道德研究においては、道德関連状況を描写したシナリオを用いて実験参加者の反応を測定するのが一般的な手法である。しかし、研究者たちにより開発された実験刺激に対する研究者たちの解釈と実験参加者の解釈が異なるという指摘がある。また、西欧において有効とされている実験刺激が、非西欧においても有効であるかは疑問である。そこで、本論文では、主に Shweder による道德多元論の考え方にに基づき、人々の道德判断における文化の影響を、以上3点の問題点に着目し検討を行なった。

Shweder の Big Three 理論のような、いわば西歐文化生まれの理論における3つの観点の分類が、非西歐文化において現実的・実用的であるかどうかについては十分な知見が蓄積されてきたとは言いがたい。当該文化における道德観を明らかにするためには、その文化内で日常的に観察される道德違反状況に共通する特徴や、分類のパターンなどを検討する必要がある。そこで第2章（研究1および2）では、研究者ではなく実験参加者に記述してもらった自文化に即した日常場面での道德違反状況を収集した。そしてそれらの状況がどのような特徴を持ち、定義的にどのように分類されるのかを検討した。具体的には、日本人大学生とアメリカ人大学生に、まず Shweder の3つの道德的観点の定義と例を呈示し、それぞれの観点到違反するような状況を、各自で自由に記述することを求めた。その結果、実験参加者は、それぞれの道德的観点について定義に沿った理論的理解をしながら違反状況を記述していることが明らかになった。また、特筆すべき点として、アメリカ人による定義的な自律の倫理違反状況の多さが挙げられる。アメリカ

カ人は、道德違反を主に自律の倫理の観点で解釈することが示唆された。また、日本人による神性の倫理の違反状況における、定義的な自律の倫理違反状況（例えば動物虐待）の割合の多さも特筆に値する。つまり、西欧的な道德的観点から言えば、神性の倫理が問題となる状況だけでなく危害や公平さ（自律の倫理の中心的論点）が関係しているような状況も、日本人はまとめて神聖さの観点から解釈しようとするのだと考えられる。暴力のような物質的損害が生じる状況は、日本人にとって穢れであり、また、不正は日本において「汚い」ととらえられる点については小杉 (2013) が指摘しており、日本文化的な観点においては神聖さと危害・公平が互いに独立したカテゴリーではないという可能性が示唆された。研究2においては、研究1で収集した道德違反状況を分析し、日本とアメリカの各文化で重要視されている道德的観点を探索的に検討した。実験参加者が挙げた道德違反状況の数の比較から、日本人は共同体の倫理に関する違反状況を他の道德的観点の違反状況より多く記述したことが示された。アメリカ人に関しては、違いが見られなかった。さらに、アメリカ人のデータに関してのみ、記述された道德違反状況に含まれる道德関連単語数の比較を行なった。この分析には、**Moral Foundations Dictionary (MFD)** という単語辞書を用いた。その結果、アメリカ人は、どの道德的観点かに関わらず、自律の倫理違反に関連する単語を多く用いて道德違反状況を記述していたことが示された。

Shweder の理論の中で特に重要なのは、人間は、自分が所属する文化が持つ性質に見合った観点を重要視しながら生きているということである。つまり、文化の特徴によって、状況理解の際の道德的観点には偏りがあるということである。例えば、欧米のような相互独立的文化では自律の倫理が、他方インドのような相互協調的文化では共同体の倫理が重視されることが明らかになっている。そこで第3章（研究3および4）では、従来の研究において注目されてきた、人間が自文化で起こる道德違反状況をどの観点からとらえるのかを2通りの方法で検討した。さらに、研究4においては、それらの状況を特徴づけている集団的共有信念の人間に対する影響についても実証的に検討した。研究3では、第2章で収集された道德違反状況から、研究者から見ても定義的に一致している状況だけを用いて、アメリカ人と日本人の参加者たちに道德的解釈を求めた。具体的な質問として、「各状況はどの道德的観点の違反なのか」「どの程度の強さで違反していると考えるか」を用意した。その結果、自文化で観察される日常的な共同体の倫理違反状況は、他文化のそれよりも成員間で共有され、悪いと評価されることが示された。研究4では、状況サンプリングという手法を用いた。これは、研究3のように研究者が実験刺激を選択するのではなく、記述されたものをそのまま用いる方法である。研究4の結果から、自文化で重視される観点における、自文化の中で観察される道德違反状況は他文化の中で観察されるそれよりも共有され悪いと判断されることが示された。また、米国で生起する道德違反状況は日本で生起する状況に比べ日米参加者問わず悪さを感じさせることが明らかになった。つまり、道德違反状況の悪さの程度は、文化ごとに重

みの違う道徳的解釈によって異なることが示唆された。研究3と4の結果における違いは、実験刺激に研究者の解釈が含まれているかに起因すると考えられる。

道徳判断の社会性に関して、先行研究から得られた理論的な枠組みを確認するためには、ある文化に生きる人々が、現実世界において、言葉を通じてどのように道徳に関する表象を共有しているのかという観点から観察データを検討することが必要となってくる。そこで第4章（研究5, 6, および7）では、現実世界でどのように道徳判断が伝達・共有されているのかについて、主にビッグデータを対象とした検討を行なった。まず研究5では、特に計算社会科学的アプローチの際に有用であるMFDの日本語版の作成を試みた。研究6では、オリジナルの辞書と翻訳版辞書を用いて、従来の心理学的手法で得られた言語表象と、ツイッターで交わされる会話における言語表象の違いを検討した。その結果、ツイッターにおいて英語ユーザーは伝統や権威に関する共同体の倫理違反を伝達していることが多く、日本語ユーザーは神性の倫理違反に関する言語を多く使用していることが示された。さらに、ツイッターという現実世界における道徳的言語表象のパターンを日本語と英語で比較した。その結果、日本人は実験室では他人の痛みに関する自律の倫理違反に関する単語の割合が多いが、ツイッターにおいては神性の倫理違反に関する単語の割合が大きかった。このような言葉遣いの差異は、ツイッターのような実験室外において、人々が単に自身の道徳判断を発信するのではなく、他の同一集団成員に共有されやすい道徳判断を表出している可能性があることを示唆している。研究7では、どの道徳的観点を重要視するかという個人特性がツイッター上での道徳関連単語の頻度に与える影響を検討し、特に公平性に関する道徳的観点がツイッターにおける道徳関連単語数を予測することが明らかになった。

第5章では、研究1から7によって得られた知見を概括し、総合的な考察を行なった。本論文における理論的および実証的研究は、道徳的観定の適用に関して、人々の解釈と、それらの人々が生きる環境が人々に与える影響の両方から比較を行うものであった。Shwederが提唱した理論について、人間が共有している道徳的信念の影響を考慮した、すなわち、真に文化（人と環境の相互作用）の影響を検証した最初の研究といえる。そして、道徳に関する問題（e.g., 解釈, 行動）について、個人内要因に注目する従来の考え方ではなく集団間における差に注目して検証することに意義があるといえる。本研究により、文化間の道徳意識に関する違いはもちろん、同一文化内における道徳意識の分散が生まれる説明も可能となる。また、同じ状況に直面しながらも文化ごとに道徳的解釈を導く観定が異なることが明らかになることで、文化間の対立における根本的解決策をも模索することが可能になるだろう。さらに、道徳判断について検討するということは、我々の「人間らしさ」について改めて問い直すということである。このような意味で道徳判断に関する研究は、例えばAI技術への応用などの実践的可能性もあり、本論文は学際的にも意義深い知見を提供する取り組みであった。